バー・アンバー（１０）アダルト小説

多谷　昇太

さあてＭＡＤの野郎どんな顔をしやがるか俺は口を結び顎の筋肉を隆起させて診察室へと向かう。しかし中に入ると（そこは４坪ほどの診察室だったが）デスクトップパソコンを置いた机の前に腰かけていたのはなんと女医だった。あれ？ＭＡＤ博士はどうした？とたたらを踏まされる。これでは来た甲斐がない。ＭＡＤ博士との直接対決を期していたのに…と気が抜けること甚だしい。しかしひょっとして彼が非常勤医師であることも考えられるし、俺は気を取り直すと女医に軽く一礼をし、女医の横に置かれた椅子に腰をおろした。室内を見渡せば診察用具と云えば静注台が立っている程度の簡素なものだ。精神科など始めてなのでこれからどんな診察を受けるのか多少とも気になったが、しかしもともとこちらは正常者だし、精神科など所詮素人騙しのようなものだろうと高を括っていたから、受け答えなど適当でいいと余裕をもこいていた。女医は一礼した俺を垣間見ただけで礼も返さずにパソコンを暫時打ち続けている。おかっぱ頭をした３０半ばぐらいの女で横顔は大きなマスクで覆われメガネをかけている。けっ、可愛くねえ女とイラつくが顔には出さない。ややあって顔はパソコンを向いたままで「なんで予約を入れなかったの？」とボソッと訊いて来た。

「え？」戸惑う俺に「なんで予約を入れなかったのと訊いているのよ。このコロナ下で、受診できるのかどうか聞くのが当たり前でしょ？」云われてみれば確かにそうだ（云い忘れたが現在の日付は２０２１年の１０月で、コロナへの自主規制が解除された時分である）。あっちこっちの病院やクリニックではコロナ感染を嫌って厳しい診療規制を設けていた。しかし俺はワクチン接種を地元の公的機関で既に済ませていたし、またここ一年ほどは病院などへは一切行くことがなかったから昨今の診療事情など門外漢だったのだ。予約など一切頭の中になかった。だ

から本来なら受付の段階で断られて然るべきだった。この先生の突っ慳貪（つっけんどん）さは恐らくそれが原因だろうがそれにしても初診の患者には度が過ぎるようだ。てんで詳しくはないのだが物の本などで読んだ範囲では「支持的精神療法」とか云って患者の話をゆっくりと肯定的に受け止め共感するのが精神科の初診における基本だと聞いている。ところがこの先生にはそんな気などまったくない。ようやくパソコンを打ち終わって椅子を回転させ俺に向き直る。「まあ（予約無しは）いいわ。それで？なに、眠れないんだって？」と、まあ横柄そのものだ。ムカッとしてけつをまくりたくもなったがしかしそれではＭＡＤ博士への道が断たれてしまう。昨日のバー・アンバーのダサいママへの堪忍と云い忍従の連続だ。俺はミキの顔を思い浮かべながら返事をする。

「ええ、そうなんですよ。ここ１ケ月ほど寝不足が続いていて、だからその…睡眠薬を頂きたくって」

「そりゃ必要なら処方するけどね、だけどあんた、ここは精神科なのよ。まずは心理療法からよ。あんたに心理教育をしなきゃならないの。どうなの？そんな寝不足になるほどの〝鬱（うつ）っ気〟でもあるの？」

鬱（うつ）っ気と来やがった。その鬱をレクチャーするのが心理教育だろうが？こいつまったくぞんざいだ。まるで早く俺を追い出したいかのようだ。しかしそれなら端っから予約なしを理由に診療を拒否すればいいではないか。なぜ入れたのか。どうにもその対応ぶりが図りかねる。しかし医者は委細かまわずに「どうなの？」と畳みかけて来た。

「はあ、その…ちょっと剣呑になるんですが、ここのところ反社と思われる連中に取りつかれてまして、それでそのう…それへの心配とかがあって…他にも…」

「他にも？」

「はい…」と返事してから俺はいっちょうここで昨晩見た（と云うか赴いた）夢を断片的にでも語ってやろうかと色気を出す。この〝女史〟野郎も一応は精神科医と云うのならユング心理学などへの見識は

あるだろうし、それならせっかくこうして赴いて来たのだから、こちらも専門的立場からの分析なりを聞きたくもなったからだ。それに万が一、俺の話に興味を持ってくれて、俺に胸襟を開いてくれたらめっけものというものだ。ＭＡＤ博士への道が開けるかも知れない。

「はい、実は昨晩何と云うか…強烈な悪夢を、い、いや、夢を見まして。それが教示夢と云うか、実に俺にとっては示唆に富んだものだったんです。ですからその、これへの夢判断と云うか、何某かのレクチャーをいただきたくて」

「夢判断？！」と女医がマスクの下で吹き出したようだ。うまいぞ。これは行けるかも…。

「いや、ははは。夢判断とは失言でした。申しわけない。その…実は昨日来不思議なことが俺の身に起きてまして、昨晩見た夢というのもその延長線上の…一種セレンディピティのように思えるんです。ひょっとしてこれはユング心理学で云う集合的無意識か、あるいはアカシックレコードにつながってしまったのではないか…などと思えるほどなんです」

「ほう…」と女医の身が乗り出し気味になる。案の定心理学上の専門用語を駆使してみればと思い立ったのが功を奏したようだ。

「そうですか。それならあなたはちょうどいい医者にかかりに来たかも知れないわよ。いや実はね私が大学で専攻していたのが心理臨床におけるユング心理学の応用なのよ」

「です」言葉となり「あんた」が「あなた」となった。効果覿面だ。インタビューにおけるジャーナリストとしての俺の６つの指針（つまり虎の巻き）は昨日のミキとのやりとりで先に示したが、ここではそれ以外の〝霊界ジャーナリスト〟としての俺の感が働いた形だった。突っ慳貪きわまりない医者ではあったが何かしらＭＡＤ博士に通じる雰囲気をこの辺に、すなわちユング心理学辺りに感じたのだ。乗せるまでもなく女医が続ける。

「主体性、つまり〝私〟とはそもそも何かということね。今までは心理療法をする上でクライエントに

対してこちらセラピスト側が社会の共通性を基盤として接して来た、どうかすると押し付けてさえ来た弊害と云うか、反省すべき点が旧来の精神科にはあったのよ。どうかするとそれがクライエントの発達障害を助長さえさせなかったかと…ね」
わかるかな？という目で医者が俺を見ている。ここで逸らしてしまっては止んなるかな、である。俺は意を受けるべく必死に頭を働かせて「なるほどですね。むしろクライエント側にもっと素直に寄り添おうと、無理に矯正をするのではなくクライエントの心の実態をまず知ろうということですね」などと口から出まかせ気味に云う。
「そうそうそう、そういうことよ。自閉症や統合失調症の患者にはハッキリと自他未分の兆候がある。そしてユング心理学では健常者の当たり前である自我よりも無意識の方に、つまり自他未分と思われる、超自我サイドに重きを置いている分け。だから…」
「だから、未だ自閉や精神分裂には至っていないだろう俺のような…つまり健常者から集合的無意識への手がかりでも得られたら目っけものだと…」
女医がマスクの下でまた吹き出した。
「あなた面白いわね。そう無下に云われてもね…そうでもないわよ。こちらも仕事は心得てますよ。ヤクザへの心配は警察にでもお願いするしかないけど、あなたが夢で受けたという…その、強烈なサジェストに対しては適切なアドバイスをして上げられますよ。それで？いったいどんな夢を見たの？」
夢で見たどころか昨晩などはあっちこっちで幽霊を目撃するという凄まじい体験をしているのだが、しかし俺はここで来院の本来の目的に思いを返す。専門的見識への色気云々よりもこちらの方がやはり先だ。俺はかまをかけた。
「ええ…そうなんですけど、その前にちょっと教えていただけたら。そのう、先生がユング心理学を専攻されたという大学はいったいどこの大学なんです？」
「××大学よ」と誇らしげに云う。
「ああ××大学。それは大したものですね。それで、

その××大学のなんと云う教授に付かれたのですか？」

んーっ？という顔に女医がなった。何でそんなこと迄聞くのよという分けだがそれをそのまま口にする。

「そんなことまでは治療に関係ないでしょ」と突っ撥ね「どうなの？夢の話は。面倒臭いのなら聞くのは止めるわよ。まあ、せっかく来たんだから、検査をしてからごく軽い睡眠剤でも処方してやるわよ。看護婦さん」と傍らの看護婦に指示をする。「こちらへ。血液検査をします」と看護婦が俺を静注台へと誘う。しかし俺はゴネた。「結構ですよ。血液検査など。それより先生、自我の便利性に立つ現代人が、それゆえに自我を超えるものへの狭窄現象を起こしている、だから心的危機に陥っているという…ユング心理学を地で行かれたようですな。どうやら大学の恩師（たぶんＭＡＤ博士）への忠義立てが先生の自我のようですな。じゃ失敬」と云い放って俺は止めるのも聞かずに診察室を出てしまった。もう大学名は聞いたからあとはそこの医学部、なかんずく心理学の教授名を検索すればいい。危惧したが医者も看護婦も診察室から追って来なかった。あとは診察代を払ってサヨナラするまでだ。（…続く）

【自我と無自我の象徴 from pinterest】